『三四郎』における「迷羊（ストレイシープ）」の起源と解釈

―『トム・ジョウンズ』との比較を通して―

江口　真規

1. はじめに

夏目漱石前期三部作の一つである『三四郎』は、明治41（1908）年、『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に約4ヶ月にわたり掲載された。この作品では、三四郎が想いを寄せる女性美禰子（みねこ）が「迷子」の英訳として使う「迷へる子（ストレイ、シープ）」にはじまり、「stray sheep（ストレイ シープ）」「迷羊（ストレイシープ）」という語が随所に登場する。これらの語については、『新約聖書』の「迷い出た羊」の逸話が念頭に置かれたものであると解釈されてきた。しかし、“stray sheep”という言葉は聖書そのものにはうかがえない。この語が最初に用いられたのは、ヘンリー・フィールディング（Henry Fielding, 1707－1754）の小説『トム・ジョウンズ』（*The History of Tom Jones, a Foundling*, 1749）であり、『三四郎』とこの作品の間には幾つかの関連性が見受けられる。漱石の英文学者としての側面を考慮すると、18世紀英文学に造詣が深かった彼は、この『トム・ジョウンズ』における“stray sheep”の用法を自作に応用したのではないだろうか。『トム・ジョウンズ』では、“stray sheep”は姦通の罪によって社会から追放された女性を表す言葉であり、『三四郎』のヒロインである美禰子にその意味が適用された可能性を指摘できる。

本論では、『トム・ジョウンズ』における“stray sheep”の用例を参考に『三四郎』の「迷羊（ストレイシープ）」を解釈することにより、「新しい女」の典型とみなされてきた美禰子像を問い直し、当時のマスメディアを賑した「堕落女学生」としての側面から論じたい。神によって救われる存在である“stray sheep”は、『三四郎』では、明治社会の中でさまよい救われざる運命を強いられた女学生を体現するものへと変容しているのである。

2. 「迷へる子（ストレイ、シープ）」「stray sheep（ストレイ シープ）」「迷羊（ストレイシープ）」の登場場面

まずはじめに、『三四郎』の中で「迷へる子（ストレイ、シープ）」「stray sheep（ストレイ シープ）」「迷羊（ストレイシープ）」という言葉が登場する場面を確認していきたい。以下、本論での引用は『漱石全集　第五

巻』（岩波書店、1994年）によるものとし、（　）内はそのページ数を示す。なお、本論ではルビの表記にも注目するため合わせて記載する[1]。引用下線部は筆者による。

第一に、菊人形参観の日、三四郎と美禰子が人混みを抜け小川の縁を歩いている場面である。美禰子は、集団から離れた三四郎と自分を「大きな迷子（まひご）」（416）にたとえる。

> 「迷子（まひご）」
> 女は三四郎を見た儘でこの一言（ひとこと）を繰返（くりかへ）した。三四郎は答へなかった。
> 「迷子（まひご）の英訳を知って入（い）らしつて」
> 三四郎は知るとも知らぬとも云ひ得ぬ程に、此問（とひ）を予期してゐなかつた。
> 「教えて上（あ）げませうか」
> 「えゝ」
> 「<u>迷（ストレイ）へる子（シープ）</u>―解（わか）つて？」（417）

次に、菊人形参観の翌日、三四郎と友人の与次郎が大学の教室で会話を交わす場面である。三四郎の帳面を覗き込んだ与次郎は、そこに「stray sheep（ストレイ シープ）」（420）という語句が乱雑に書き込まれているのを見つける。講義の内容を確認するものの要領を得ない返事をする三四郎に、与次郎は「全然stray sheep（ストレイ シープ）だ。仕方がない」（421）と言う。

その日三四郎が下宿に帰ると、二匹の羊が描かれた絵葉書が届いている。宛名の下には「迷へる子」（426）と書かれており、三四郎は「美禰子の使つたstray sheep（ストレイ シープ）の意味」（426）が自分と彼女の二人を指していたことに気付く。

美禰子は三四郎に好意を寄せていると思われる仕草を見せていたが、二人の恋愛が成就することはなかった。最終的に彼女は縁談の相手であった兄の友人と結婚する。三四郎は美禰子の結婚を知り、その事実を確かめるため、また借りていたお金を返すため、彼女のいる教会へ向かう。三四郎は二人で過ごした時間を思い出しながら、美禰子が外に出て来るのを待っている。

> かつて美禰子と一所に秋の空（そら）を見た事もあつた。所は広田先生の二階であつた。田端（たばた）の小川の縁（ふち）に坐（すは）つた事もあった。そのときも一人（ひとり）ではなかつた。
> 迷羊（ストレイシープ）。迷羊（ストレイシープ）。雲（くも）が羊（ひつじ）の形（かたち）をしてゐる。（602）

この後、美禰子が教会から出て来る。三四郎からお金を受け取り、ヘリオトロ

ープの香水が滲みこませてあるハンカチを彼の顔に近付ける。

「ヘリオトロープ」と女が静かに云つた。三四郎は思はず顔を後へ引いた。ヘリオトロープの罎。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。空には高い日が明らかに懸る。

「結婚なさるそうですね」

美禰子は白い手帛を袂へ落した。(604)

最後に、丹青会の美術展での場面である。美禰子をモデルとして描かれた原口の作品「森の女」の前には人だかりができている。与次郎が三四郎にその絵の感想を尋ねる。

「どうだ森の女は」

「森の女と云ふ題が悪い」

「ぢや、何とすれば好いんだ」

三四郎は何とも答へなかつた。たゞ口の内で迷羊、迷羊と繰り返した。(608)

以上が、『三四郎』において「迷へる子」「stray sheep」「迷羊」という語が登場する場面である。

3. “stray sheep”の起源

美禰子がキリスト教徒であることを踏まえると[2]、彼女が「迷へる子」という言葉を発した背景としては聖書における羊の表象の影響が考えられる。「全く耶蘇教に縁のない男」(602)である三四郎は、作品の終盤近く、美禰子が教会にいると聞いた時に初めて彼女がキリスト教徒であることを知る。キリスト教では、羊は美しいもの、犠牲・生贄、あるいは神の保護を必要とするものの象徴である[3]。「迷える羊」は、悩み苦しみながら生きる信仰者であり、それに対して神は「よき羊飼い」とたとえられる。特に“stray sheep”という語は、『新約聖書』マタイ伝第18章12節における「迷い出た羊のたとえ」を彷彿させるものである。

How thinke yee? if a man have an hundred sheepe, and one of them be gone astray, doth he not leave the ninetie and nine, and goeth into

the mountaines, and seeketh that which is gone astray? [4]

〔汝等いかに思ふか、百匹の羊を育てる人あらんに、若しその一匹まよはば、九十九匹も山に遺しおき、往きて迷へるものを尋ねぬか。[5]〕

「迷子」にあたる英語としては“lost child”や“stray child”が考えられるが、美禰子があえて「迷へる子（ストレイ、シープ）」という語を用いたことから、『三四郎』における羊はこの「迷い出た羊のたとえ」に基づいた解釈が多くみられる。川崎寿彦は、美禰子が「迷へる子（ストレイ、シープ）」という言葉を提示した理由として、第一に“sheep”という語が単数・複数ともに同形であり、何を示すか曖昧な部分がプロットの展開に直接関係しているということ、第二に“stray sheep”は「迷って落ちこんでゆくもの」を意味することから、美禰子が望まない結婚に妥協した罪を意識したものであると指摘する[6]。佐藤智美も川崎の論を支持し、美禰子に敢えて「迷へる子（ストレイ、シープ）」と訳させた点には聖書の背景を生かそうとするねらいが漱石にあったと分析している[7]。

しかし、“stray sheep”という語そのものは『旧約聖書』『新約聖書』ともにみられない。*Oxford English Dictionary*によると、この言葉の初出はヘンリー・フィールディングの『トム・ジョウンズ』である。

『トム・ジョウンズ』では、捨て子トム（Tom）の誕生から成長、そして自らの出自の発見と恋人ソファイア（Sophia）との結婚が描かれるが、“stray sheep”という語は第18巻第8章のウォーターズ夫人（Mrs. Waters）の言葉にみられる[8]。ウォーターズ夫人は本名をジェニー・ジョウンズ（Jenny Jones）といい、学識のあることで評判の女性であった。しかし、教養の高さによって彼女は周囲から顰蹙を買い、奉仕先の主人との間柄を疑う根拠のない噂を立てられる。トムの実母はこのような状況に乗じ、私生児として出産した子どもを置き去りにしたと彼女に偽って告白させる。ジェニーは町から追放され、離れた場所で暮らしていた彼女はウォーターズ大尉（Captain Waters）と事実上の婚姻関係を結ぶが、その部下であるノーザトン（Mr. Northerton）とも交際するなど、放埒な女性として知られていた。彼女はある日偶然にも成長したトムと肉体関係を持つことになる。以下はウォーターズ夫人が自らの半生をトムの養父であるオールワージ（Squire Allworthy）に語り、トムの出自を明らかにする場面である。

‘And consider, sir, on my behalf, what is in the power of a woman stripped of her reputation and left destitute; whether the good-natured world will suffer such <u>a stray sheep</u> to return to the road of virtue,

even if she was never so desirous.' [9]

〔拙訳：「私の身になって考えてももらいたいのですが、名声を奪われ一文無しで放り出された女に、一体どのような力があるというのでしょう？本人がどんなに強く望んだとしても、良き世の中は、そのような迷える羊を美徳の道に戻らせてくれるのでしょうか。」〕

『トム・ジョウンズ』では、高い教養を身につけてはいるが不義の罪によって社会から排除されたウォーターズ夫人が、"stray sheep" に擬えられているのである。

『三四郎』と英文学との関係については、作品内で言及されるトマス・ブラウン（Sir Thomas Browne, 1605－1682）やアフラ・ベーン（Aphra Behn, 1640－1689）についての研究が多い。『トム・ジョウンズ』については本文で直接述べられることはないが、漱石が専門的に研究していた18世紀イギリス小説を代表する一つであり、『三四郎』の創作にあたり参考にされたと考えられる。この作品は漱石の蔵書目録に記録されており[10]、また、フィールディングについては、彼が東京帝国大学で英文学の教鞭を取っていた際の講義をまとめた『文学論』（1907）、『文学評論』（1909）、『英文学形式論』（1924）内で頻繁に論及されている。特に『文学論』では、日常的な瑣末な出来事を荘厳な口調で語ることの面白みについて、『トム・ジョウンズ』の一場面を引き合いに出して論じた章がある[11]。

漱石と『トム・ジョウンズ』との関連は、講義録だけに見られるものではない。『三四郎』についても、この作品との間にいくつかの共通点が確認できる。第一に、『ハムレット』の演劇鑑賞についてである。『三四郎』では、三四郎が友人たちとともに文芸協会主催の演芸祭に出かける場面がある。この演芸祭は、作品の舞台となっている明治40（1907）年の11月22日から25日にかけて本郷座で行われたものであると推定される。ここでは、翻訳作品としては本邦初演となる坪内逍遥訳の『ハムレット』が上演された。この観劇の場面には、『トム・ジョウンズ』でトムが友人のパートリッジ（Partridge）らと『ハムレット』を見に行く第16巻第5章と類似点が多い。たとえば、『三四郎』の『ハムレット』では、ハムレット役の俳優は広田の所蔵する本に掲載されていた「西洋の何とかいふ名優の扮(ふん)したハムレツト」（589）の写真の人物に服装や表情が似ているという。この「名優」とは、『トム・ジョウンズ』でトムが観劇する『ハムレット』に出演し、その役柄で名を馳せ当代屈指の俳優と賞賛されたデイヴィッド・ギャリック（David Garrick, 1717－1779）のことであると推測できる[12]。また、三四郎が「御母(おつか)さん、それぢや御父(おとつ)さんに済(す)まないぢやありませんかと云ひさうな所で、急にアポロ抔(など)を引合に出して、呑気に遣(や)つて仕舞ふ」（589）と述べている箇所[13]は、『ハム

レット』第3幕第4場であり、ハムレットが母親を糾弾する場面である。これは、『トム・ジョウンズ』でパートリッジが王妃の態度に憤慨する箇所[14]に対応している。

『三四郎』と『トム・ジョウンズ』の第二の共通点として、作品内でのアフラ・ベーンへの言及が挙げられる。『三四郎』では、三四郎が大学の図書館で偶然アフラ・ベーンの小説を手に取る。その名を知らなかった彼が英文学に詳しい広田に尋ねてみると、「職業として小説に従事した始めての女」(385)であると説明し、代表作『オルノーコ』(*Oroonoko, the Royal Slave*, 1688)の話をする。一方、『トム・ジョウンズ』では、トムが滞在する旅館に居合わせたアイルランド紳士がベーンの小説を読んでいる[15]。また、ソファイアが*The Fatal Marriage* (1694)という悲劇作品を読む場面があるが[16]、これは、アフラ・ベーンの小説*The History of the Nun, or the Fair Vow-Breaker* (1688)をもとにしたトマス・サザーン(Thomas Southern, 1660－1746)の戯曲(1694)である。

これらの共通点は、ともに女性の姦通の問題と関連している。二作品が言及する『ハムレット』の場面は、ハムレットが母親の不貞を追及するシーンである。アフラ・ベーンについては、広田が指摘するように初の女性職業作家であるが、このような認識が普及したのは1970年代のフェミニズム批評以降のことである。漱石が英文学を研究していた時代には、その謎に満ちた経歴と放埒な性格から、アフラ・ベーンは単なる三文文士的存在としか考えられていなかったのである[17]。

以上のような漱石の講義録や『三四郎』と『トム・ジョウンズ』との共通点からは、ロンドン留学(1902－1903年)帰国後数年を経た漱石が『三四郎』を執筆するにあたり、研究対象であった18世紀英文学を参照し自らの作品に取り込んだ可能性が指摘できる。「迷へる子(ストレイ、シープ)」「stray sheep(ストレイ シープ)」「迷羊(ストレイシープ)」という言葉についても、聖書での意味合いだけではなく、“stray sheep”という語の初出である『トム・ジョウンズ』での用例、つまり不義の罪によって社会から疎外された女性という意味が適用されているのではないだろうか。

『トム・ジョウンズ』の教養あるウォーターズ夫人に対し、『三四郎』では、「迷羊(ストレイシープ)」は高等教育を受けた女学生の比喩として用いられており、その「迷い」は性的モラルからの逸脱を含意するものであったことを次項で分析する。

4.「堕落女学生」としての美禰子

「女学生」という存在、そして彼女たちを表象する「女学生文化」は、女子教育の発展とともに明治30年代に誕生した[18]。近代女子教育の導入により女学校の設

立が相次ぎ、明治32（1899）年の高等女学校令で道府県の高等女学校設置が義務化されると、女学生の数は年々増加し女子教育最初の開花期を迎えることになる。「海老茶袴」や西洋風の束髪、自転車での通学、特徴的な言葉遣いなど、彼女たちの間には独自の文化が広まった。特に『三四郎』が出版された頃には、女学生は明治前期に比べ世間の注目になる程度に数が増えつつもそのエリート性を失わずにいた時代であり、憧れの的となる条件が整っていた[19]。

『三四郎』では、よし子が女学校に通学しているのに対し、美禰子が女学生であるという記述はない。しかし、「Pity's akin to love」（389）[20]と美しく発音できるほど英語に堪能であることからは、彼女が洋学を中心とする高等女学校での勉学を修めていたことが想定される。高等女学校は尋常小学校卒業後の12～17歳の生徒が通学する場であり、美禰子は三四郎と同年齢（23歳）であるため、彼女は高等女学校卒業後兄と二人で暮らしていると考えられよう。また、美禰子の服装や言葉遣いからは、卒業してもなお彼女が女学生の風俗を積極的に取り入れていることが読み取れる。野々宮が送ったリボンを髪に結んでいる様子（343）や「廂の広い髪」（489）という表現からは、彼女が女学生の間に流行した髪形を真似ていることがわかる。美禰子の発する言葉にも女学生特有の言葉遣いがうかがわれる。彼女は、「美くしい事」（412）「迷子の英訳を知って入らしつて」（417）「迷へる子―解つて？」（417）のように、語尾に「て」や「こと」をつけた言い回しを多く用いている。「能くつてよ。知らないわ」（530）というよし子の台詞に代表されるように、「て」「てよ」「こと」のような語尾をつけた話し方は女学生特有のものであった[21]。

女学生は時代風俗の象徴として世間の注目を集め、教養のある「新しい女性」像を提示してきた。その一方で、伝統にとらわれない新しさと、西洋の「ラヴ」の概念による影響から、本業である勉学よりも恋愛に現を抜かす者もいた。彼女たちが理想とする「ラヴ」の思想はプラトニックであることを前提とするものであったが、日本にその概念が輸入され実践が試みられると、「色」の伝統との葛藤により肉体関係が交えられることもあった。その結果、未婚の妊娠や堕胎など、女学生の性モラルの崩壊が問題視されるようになる[22]。彼女たちは世間から「堕落女学生」というレッテルを貼られ、好奇と非難の視線を浴びることになった。

当時の雑誌や新聞は「堕落女学生」に関する記事を多く取り上げ、それと相俟って、「自由恋愛」を享受しようとしつつも失恋や望まぬ妊娠など悲劇的な結末を迎える女学生の物語を描く新聞小説が数多く現れた。読売新聞に連載された小杉天外の『魔風恋風』（1903）や小栗風葉の『青春』（1906）などがその代表である。新聞の販売部数が増加し新聞社の競争が激化していた時代の中で、朝日新聞社に入社

した漱石には、このような他紙の新聞小説を凌ぐ内容が期待されていた[23]。「堕落女学生」の記事を興味深く読んでいた読者層の要求を考えると、同様の要素が漱石の作品にも求められていたと考えられる。

それでは、このような需要を背景に『朝日新聞』に連載された『三四郎』では、女学生への眼差しはいかなるものであるのか。女学生文化を象徴する美禰子がさ迷える羊に喩えられていることは、『トム・ジョウンズ』における「性モラルが崩壊した女性＝羊」という図式が明治の女学生に適用されたものと考えられる。美禰子は野々宮や三四郎に好意を寄せていた、あるいはそのような振る舞いを見せてはいたが、別の男性と結婚する。男女の恋愛が公には受け入れられ難かった時代に、彼女は恥じらいを見せることもなくこれらの男性数名と交際していた。彼らとの間に肉体的な交わりがあったという確証は得られない。しかし、美禰子が随所に見せる疲労の表情、身体の不調に関する表現は、悪阻の症状を想起させ、彼女の妊娠がほのめかされているとも解釈できるだろう。

> 其時三四郎は美禰子の二重瞼に不可思議なある意味を認めた。其意味のうちには、霊の疲れがある。肉の弛みがある。苦痛に近き訴へがある。(409)

> 色眼尻に堪へ難い嬾さが見える。(552)

> 其眼には暈が被つてゐる様に思はれた。何時になく感じが生温く来た。頬の色も少し蒼い。(553)

これらの描写は、唐突であり、作品の筋とは無関係とも思われる。しかし、このような記述によって、三四郎の知らぬ間に早急に決定された彼女の結婚の原因が妊娠であったという可能性が示唆されてもいるのではないだろうか。美禰子にも「堕落女学生」としての一面を読み取れるのである。

「羊」という動物を女性の性モラルの崩壊と結び付ける背景が存在していた点も合わせて指摘したい。西洋の水夫が航海中船内の緬羊を犯すという俗説から、来日している西洋人の妾となった日本人女性、あるいは外国人相手の売春婦を卑しめて「ラシャメン」(「羅紗綿」「羅紗緬」)と言うことがあった[24]。この言葉は「堕落女学生」を描いた新聞小説でも使われており[25]、漱石の『彼岸過迄』(1912)の中にもうかがわれる[26]。さらに、女学生文化を代表する「海老茶袴」もまた、「羊」と関係するものであった。これは、羊毛加工技術の発展によって明治30年代に流行したメリンス生地で作られたものであり[27]、当時の女学生は「羊」を身にまとって

いた存在であったということができる。また、美禰子は教会から出てきたとき「吾妻コート」(602) を着ており、この袂からハンカチを取り出して三四郎の顔に押し付け「迷羊(ストレイシープ)」とつぶやく。明治中期から洋装の先端として現れた吾妻コートもまた、「海老茶袴」と同様女学生に愛された羊毛製品であった[28]。性的に奔放な女性、男性によって肉体的に利用されるという「羊」のイメージが広がりつつあった当時、漱石が「堕落女学生」としての美禰子を羊に擬えたことは、決して不自然なものではなかったのである。

5.「堕落女学生」の救われざる運命－「書く女」としての可能性の否定

以上で考察したように、『三四郎』における「迷羊(ストレイシープ)」は、『トム・ジョウンズ』での“stray sheep”の用法を明治の女学生に当てはめ、その性モラルの崩壊を揶揄したものであるといえる。しかし、“stray sheep”の語を取り入れるに際し、その意味がありのままに受容されているわけではない点にも注目したい。

喜劇である『トム・ジョウンズ』では、真実が判明しウォーターズ夫人は罪を救済され、オールワージから毎年の年金を受け取ることになり、サプル牧師(Supple) と結婚する。『新約聖書』の「迷い出た羊」が神によって救われることを前提とした存在であるように、ウォーターズ夫人の罪も最終的には報われるのである。しかしながら、『三四郎』の美禰子の場合はどうであろうか。彼女は、結婚が決定した後教会の前で三四郎に会ったとき、「われは我(わ)が愆(とが)を知る。我が罪は常に我が前にあり」(604)とつぶやいている。これは『旧約聖書』詩篇第51章3節の言葉であり、ダビデが戦隊の部下ウリヤの妻を王宮に召し入れ妊娠させたうえウリヤを戦死させたという罪を告白し、神の許しを乞う場面にみられる。この後に続く言葉は「観よわれ邪曲のなかにうまれ罪にありてわが母われをはらみたりき」[29]であり、ここでの「罪」が聖書の中で罪悪とされている人間の肉欲であることがわかる。この一節を口にした美禰子は、三四郎や野々宮を意のままに振り回し複数の男性と交際していたことを「罪」として意識しているのである。そして、この罪悪感は結婚生活に入ることによって救われるものではない。丹青会の美術展を夫と「「二人(ふたり)」」(606) で見て回っているように、結婚によって彼女は仲間たちの「群れ」から一人離れ、彼らと交わり罪を償う機会を失ってしまう。ここにおいて、救済なき“stray sheep”という新たな意味が付与されているのである。

美禰子を救われざる存在としたのは、彼女をめぐる結婚問題だけではない。彼女の進路もまた、その原因の一つであった。

立身出世が盛んに叫ばれた『三四郎』発表当時の高等学校卒業生の進路について

みてみたい。まず男子学生についてみてみると、就職率は決して高くはなく、何の職業にも従事しない「高等遊民」の存在が問題視されるようになっていた。九州から上京した三四郎は、「是から東京に行く。大学に這入る。有名な学者に接触する。趣味品性の具つた学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間が喝采する。母が嬉しがる」(284) と考え、大学入学が将来の出世を約束するものであると思っていた。しかしながら、いざ大学に入学すると、「講義の間に今年の卒業生が何所其所へ幾何で売れたと云ふ話」(314) や、「誰と誰がまだ残つてゐて、それがある官立学校の地位を競争してゐる噂」(314) を耳にし、「未来が遠くから眼前に押し寄せる様な鈍い圧迫を感じ」(314) ていた。帝国大学卒業生の数が増えるとともに、日露戦争の頃から「学士就職難」問題が頻繁に言及されるようになり、大学を卒業することは必ずしも将来の希望を叶えるものではなかったのである[30]。実際の例として、明治44 (1911) 年東京帝国大学文科の卒業生の進路をみてみると[31]、卒業生のうち約4割が職業未定又は不詳となっている。大学院に進学し大学教授や教師の職を得るのも決して容易ではなく、高い給与が保証されているわけでもなかった。

行く末の見えない進路を歩んだのは男子学生だけではなかった。女学校を卒業した女学生もまた、高等教育を修めつつも、自ら仕事を手につける道を選択することは少なかった。当時の高等女学校ではむしろ、新時代の理想の女性の育成をうたいつつも「良妻賢母」教育が中心であり、卒業後家庭を築くことが念頭に置かれていた[32]。『三四郎』が発表された明治41 (1908) 年の「全国高等女学校ニ関スル諸調査」で東京の高等女学校の卒業生進路をみてみると[33]、職業未定又は不詳の者が全体の約7割を占めており、職業に従事した者は3割に満たず、結婚した者も全体の5%に過ぎない。高等教育を受けた若い女性が職業に就くことがいかに稀有であったかがうかがわれる。

美禰子についても、彼女は「普通の女性以上の自由を有して、万事意の如く振舞」(494) う「イブセン流」(494) の「新しい女性」像を体現しているが、職業に従事することはなかった。しかし、先に挙げたアフラ・ベーンと重ね合わせられることによって、美禰子には職業作家としての可能性が示唆されていた。アフラ・ベーンは初めて文筆を生業とした「英国の閨秀作家」(385) として広田が紹介しているが、与次郎はそれを受けて、「里見さん、どうです、一つオルノーコでも書いちやあ」(385) と美禰子に提案する。与次郎は、彼女にもアフラ・ベーンのように執筆活動によって生計を立てる能力が備わっていることを示唆しているのである。しかし美禰子は、「書いても可ござんすけども、私にはそんな実見譚[筆者注：『オルノーコ』の物語]がないんですもの」(385) とその提案を拒否している。

また、当時世間を騒がせた森田草平と平塚明との心中未遂事件「煤煙事件」(1908)との関連から、美禰子のモデルは平塚明ではないかともいわれている[34]。しかし、後に『青鞜』などの雑誌を創刊し文筆活動を行った平塚明に対し、美禰子は自ら筆を取ることはない。結婚して家庭に入り外部世界との交流も絶ってしまい、「書く女」としての可能性は否定されている。

高等女学校で勉学を修めている女学生たちが「新しい女」として歩む道のりは限られたものでしかなかった。『魔風恋風』の初野が病死し、『青春』の繁が堕胎したように、『三四郎』においても「堕落女学生」としての側面を有する美禰子の将来は明るいものではない。『三四郎』に続く前期三部作の『それから』(1909)は漱石が初めて姦通を扱った悲劇小説であり[35]、『門』(1910)ではその罪によって社会の片隅にひっそりと生活することを余儀なくされた夫婦が描かれているように、美禰子が選択した結婚生活と彼女の罪の意識は救われざるものであることが予期される。

6. 終わりに

以上、本論では、『三四郎』における「迷へる子(ストレイ・シープ)」「stray sheep(ストレイ シープ)」「迷羊(ストレイシープ)」という言葉の起源を『トム・ジョウンズ』の“stray sheep”に辿り、美禰子像の解釈を試みた。『トム・ジョウンズ』において“stray sheep”が性的に奔放な女性を表すものとして使われていることを考慮すると、美禰子は「新しい女」の象徴であるだけでなく、同時代のメディアを騒がせた「堕落女学生」としての側面も持ち合わせていることが指摘できる。明治の「堕落女学生」小説は、「明治の若者を魅了した「ラヴ」の直線的力と、その目標としての結婚ができない敗北感の大きさ」[36]を物語るものであった。『三四郎』ではまた、望まぬ結婚に終結しただけではなく「書く女」としての可能性さえもが閉ざされ、救いのない運命を強いられた「迷羊(ストレイシープ)」としての女性の将来が懸念されている。

注

1　ルビは漱石本人によって振られたものであるが、〔　〕内のルビは全集編集部によって補足されたものである。なお、初出紙(『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』)本文は総ルビである。

2　『漱石全集　第五巻』における紅野謙介・吉田凞生の注釈によれば、美禰子が通っていた教会は、その住居との位置関係や教会の建築的特徴から日本メソディスト教会の

中央会堂と推定される。

3　山下正男『動物と西欧思想』中央公論社、1974年、74頁

4　*The English Bible: Translated out of original tongues by the commanding of King James the First, anno 1661*. Vol. 38. New York: AMS P, 1967, p. 32.

5　『舊新約聖書　文語訳』日本聖書協会、1996年、28頁

6　川崎寿彦「夏目漱石『三四郎』（絵に還った美禰子）」『分析批評入門―新版』488－515頁、明治図書出版、1989年、512頁

7　佐藤智美「『三四郎』―「迷羊」の意味するもの―」『弘前大学国語国文学』第17号、19－33頁、1995年3月、23頁

8　なお、"stray sheep" と同義の言葉として、行方不明のソファイアを示す "lost sheep" という語もうかがえる（Fielding, Henry. *Tom Jones*. Oxford: Oxford UP, 2008, p. 706）。

9　Fielding, *ibid*., p. 837.

10　蔵書目録によると、漱石は1884年にロンドンでGeorge Bell社から刊行された版を所有していた。

11　『文学論』第4篇第6章において、「*Tom Jones*中Molly（賤しき家の娘）の分外に盛装して寺に賽したるが為め、四隣の嫉を買ひて遂に一場の活劇を醸せる状を写せるもの」として、『トム・ジョウンズ』第4巻第8章での文例を挙げて説明している（『漱石全集第十四巻』岩波書店、1995年、356頁）。

12　写真ではないが、その肖像画がBenjamin Wilson（1721－1788）によって描かれている（*David Garrick as Hamlet*, 1773）。

13　三四郎が「アポロ抔を引合に出(だ)して」と言っている点に関して、この演芸祭の台本が編纂されている坪内逍遥訳『ハムレット』（1909）を参照すると、第3幕第4場の王妃の台詞にある「太陽神(ハイピリオン)」を指していると想定される（「太陽神の縮髪、ジョーヴ゛神の高額、軍神のやうな此眼には三軍戦き服すべく、又此立姿は使神マアキュリーが雲に冲る高峯に降立たしたる御風情」川戸道昭・榊原貴教編『シェイクスピア翻訳文学書全集37『ハムレット』』坪内逍遙訳、大空社、2000年、157－158頁）。なお、この箇所に対応する『ハムレット』原文は以下の通りである。

"See, what a grace was seated on this brow;
Hyperion's curls; the front of Jove himself;
An eye, like Mars, to threaten and command;
A station, like the herald Mercury
New-lighted on a heaven-kissing hill"（*The Works of William Shakespeare*. Vol. VII. New York: AMS P, 1968, p. 312）.

14 "Ay, no wonder you are in such a passion, shake the vile wicked to pieces. If she was my own mother, I should serve her so. To be sure all duty to a mother is forfeited by such wicked doings. --- Ay, go about your business; I hate the sight of you" (Fielding, *ibid.*, p. 753).〔拙訳：「君が怒るのも当たり前だ。あの卑しい、極悪非道な女をばらばらになるまでゆすぶってやれ。もしあの女がおれの母親なら、おれだってそうしてやる。あんなひどいことをするのなら、親孝行も何もあったもんじゃない。――そうだ、ひっこんでしまえ。見るのも嫌なくらいだ。」〕

15 "This young fellow [the Irish gentleman] lay in bed reading one of Mrs Behn's novels, for he had been instructed by a friend that he would find no more effectual method of recommending himself to the ladies than the improving his understandings, and filling his mind with good literature" (Fielding, *ibid.*, p. 458).〔拙訳：この若者はベッドに横たわってベーン夫人の小説を読んでいた。というのは、貴婦人に気に入られるためには、知性を培い優れた文学に浸るのが一番だと、とある友人から教えられていたからである。〕

16 "The clock had now struck seven, and poor Sophia, alone and melancholy, sat reading a tragedy. It was *The Fatal Marriage*; and she was now come to that part where the poor distract Isabella disposes of her wedding-ring" (Fielding, *ibid.*, p. 698).〔拙訳：時計は今や7時を打った。可哀そうなソファイアは、一人で物思いに沈みある悲劇を読んでいた。それは『運命の結婚』で、ちょうど可哀そうなイザベラが婚約指輪を破棄する場面であった。〕

17 Rosenthal, Laura J. "*Oroonoko*: Reception, ideology, and narrative strategy." Ed. Derek Hughes and Janet Todd. *The Cambridge Companion to Aphra Behn*. pp. 151－165. Cambridge: Cambridge UP, 2004.

18 本田和子『女学生の系譜』青土社、1990年、12頁

19 佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』若草書房、1998年、151頁

20 この言葉は、アフラ・ベーンの『オルノーコ』をもとに書かれたトマス・サザーンの戯曲『オルノーコ』（*Oroonoko*, 1696）の第2幕第5場に見られるセリフである。(Thomas Southern. *Oroonoko*. Ed. Maxmillian E. Novak and David Stuart Rodes. Lincoln: U of Nebraska P, 1976, p. 44)。

21 本田、前掲書、111頁

22 佐伯、前掲書、97頁

23 有山輝雄「明治末期の新聞メディアと漱石」小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第5号、86－97頁、翰林書房、1995年11月、89－90頁

24 木村義之・小出美河子編『隠語大辞典』皓星社、2000年、1325－1326頁

25　小栗風葉の『恋慕ながし』(1898) では、娘を女学校に通わせている父親が洋学を修める彼女のことを自慢げに話すのであるが、これを聞かされた相手は、「は解った。遊芸なら、手習なら、全然舶来仕立てにして置いて、ラシヤメンにでもして夥多弗を奪取らうと云ふだね」(小栗風葉『恋慕ながし』平凡社、2008年、43－44頁) と言っている。

26　西洋人のように背の高い男性に付き添う女性を見た敬太郎は、彼女を「洋妾」と喩えている (『彼岸過迄』『漱石全集　第七巻』岩波書店、1994年、133頁)。

27　山根章弘『羊毛の語る日本史』PHP研究所、1983年、154頁

28　同上、220頁

29　『舊新約聖書　文語訳』前掲書、779頁

30　竹内洋『立身出世主義［増補版］－近代日本のロマンと欲望』世界思想社、2005年、102－103頁

31　同上、98頁

32　佐伯、前掲書、176頁

33　佐々木亨監修『文部省教育統計・調査資料集成　第三十三巻　全国高等女学校ニ関スル諸調査　第一巻』大空社、1989年

34　小宮豊隆『漱石・寅彦・三重吉』(1942)、森田草平自身の『続夏目漱石』(1944) など。

35　柄谷行人『漱石論集成』第三文明社、1992年、278－279頁

36　佐伯、前掲書、160－161頁

参考文献

＜日本語文献＞

『舊新約聖書　文語訳』日本聖書協会、1996年

有山輝雄「明治末期の新聞メディアと漱石」小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第5号、86－97頁、翰林書房、1995年11月

小栗風葉『恋慕ながし』平凡社、2008年

柄谷行人『漱石論集成』第三文明社、1992年、278－279頁

小宮豊隆『漱石・寅彦・三重吉』角川書店、1951年

川崎寿彦「夏目漱石『三四郎』(絵に還った美禰子)」『分析批評入門―新版』488－515頁、明治図書出版、1989年

川戸道昭・榊原貴教編『シェイクスピア翻訳文学書全集37『ハムレット』』坪内逍遙訳、大空社、2000年

木村義之・小出美河子編『隠語大辞典』皓星社、2000年
佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』若草書房、1998年
佐々木亨監修『文部省教育統計・調査資料集成　第三十三巻　全国高等女学校ニ関スル諸調査　第一巻』大空社、1989年
佐藤智美「『三四郎』—「迷羊」の意味するもの—」『弘前大学国語国文学』第17号、19－33頁、1995年3月
竹内洋『立身出世主義［増補版］－近代日本のロマンと欲望』世界思想社、2005年
夏目金之助『彼岸過迄』『漱石全集　第十四巻』岩波書店、1995年
平石典子「「堕落」する女学生—「女学生神話」を巡る考察（二）—」『文藝言語研究　文藝篇』第40号、75－90頁、2001年
本田和子『女学生の系譜』青土社、1990年
森田草平『続夏目漱石』養徳社、1944年
山下正男『動物と西欧思想』中央公論社、1974年
山根章弘『羊毛の語る日本史』PHP研究所、1983年

＜英語文献＞

The English Bible: Translated out of original tongues by the commanding of King James the First, anno 1661. Vol. 38. New York: AMS P, 1967.

Behn, Aphra. *Oroonoko, or the Royal Slave*. Ed. Catherin Gallagher. Boston: Bedford/St. Martin's, 2000.

Fielding, Henry. *Tom Jones*. Oxford: Oxford UP, 2008.

Hughes, Derek and Janet Todd. Ed. *The Cambridge Companion to Aphra Behn*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.

Shakespeare, William. *Hamlet. The Works of William Shakespeare*. Vol. VII. Ed. William Aldis Wright. New York: AMS P, 1968.

Southern, Thomas. *Oroonoko*. Ed. Maxmillian E. Novak and David Stuart Rodes. Lincoln: U of Nebraska P, 1976.